登場人物

上妻初美(あがつま　はつみ)
喧嘩最強元ヤンキーお母さん。四十一歳。長い金髪。バイク好き。

上妻俊幸(あがつま　としゆき)
初美の夫。サラリーマン。四十歳。痩せ型のひ弱な男。眼鏡。

上妻大吾(あがつま　だいご)
初美と俊幸の一人息子。大人しい。

沼尾(ぬまお)
初美の前に現れる謎の中年男。ハゲでデブで見るからに気持ち悪いオーラに溢れる…。

上妻大吾は、数名の友人達と一緒に、学校からの帰り道を歩いていた。
「飯田先生のおっぱいって、ホントでっけえよなぁ〜！」
「うん！僕、あのおっぱいに、顔埋めてみたいもん！」
「僕も僕も！もう思いっ切り揉みしだいてみたいね！」
「あはは！やっぱみんな考えることは一緒だな！あのおっぱいすげえもんな！正に凶器だね！」
「……」
やんちゃな同級生達のはしたない会話に、比較的大人しい性格の大吾は、最後尾で一人肩をすくめていた。彼等は皆、大切な友達だが、こういった低俗なノリに正直ついていけないと

思うこともしばしばだった。そんな時は、気配を消して、目立たないようにするに限る…。

「あと保健室の山本先生のおっぱいもでけえんだよ！」

「そうそう！あれは飯田先生以上の超爆乳だね！きゃはは！」

一行は閑静な住宅街の一画にさしかかる。大吾の家が近づいてくる。大吾はいつも家の前で一言二言交わすだけで集団からあっさり離脱した。ヒートアップする性的な会話に居心地が悪くなってきた彼は、今日も普段通り事が運ぶことを望んでいた。

だが、残念ながらそういうわけにはいかなかった。

一行と対向する前方から、こちらに向かって、一台のバイクが勢い良く走ってきたのだ。見るからにいかめしい車体の、威圧感をこれでもか

というほどにバリバリ放つ、大型のバイク。大吾は興味がないのでよく知らないが、ハーレーだとかなんとかいうらしい。

バイクは大吾の家の前で停車する。大吾達もそこまで辿り着いたところで、両者は丁度鉢合わせすることになった。

バイクから降りた人物が、フルフェイスのヘルメットを外す。後ろでひとまとめにして結ばれただけの長い金髪が、飛びでた弾みで少し揺れる。それぞれのパーツは整っているものの、眉がとても細く、目つきがやたらとキツいその勇ましい顔面も露わになる。

その人物は、大吾の方を見て言った。

「おお！おかえり、大吾！」

「た…ただいま、お母さん」

彼女は、大吾の母の初美だった。母親ともあろう立場の人間が、こんな厳ついバイクに乗っ

ていることを意外に思う向きもあるだろうが、彼女は紛れもなく、正真正銘の大吾のお母さんなのだった。

今年四十一歳の初美は元ヤンキーで、若い頃は相当やんちゃをしていたという。大吾も昔の写真を見せてもらったことがあるが、見るからに凶悪な刺繍が縦横無尽に施された特攻服に身を包んだ若い頃の母が、ヤンキー座りでカメラをギロッと睨みつけている姿には、素直に震えあがった。

勿論今は更生して立派に専業主婦・お母さんを務めてはいるが、基本的な外見や雰囲気はあんまり変わっていない。母親にはふさわしくないという批判を受けてもトレードマークの派手な金髪を黒く染めようとはしなかったし、誰に遠慮することもなく、大好きなバイクを乗り回していた。

初美はそんな、我が道を行くロックなお母さんなのだった…。

そんな母親と、友人達との偶然の邂逅に、大吾は猛烈に嫌な予感がしていた。友人達の中には、母と顔を合わせたことがある者もいる。だが、大半が今日初対面で、母の偏った性格を知らなかった。

その中の一人が、言ってしまったのだ。率先してエロトークを繰り広げていた、お調子者の少年だった。

「え、この人、大吾くんのおばちゃんなの？うっひょー♪すげー！おっぱい、超でけぇ～！」

初美は全身つなぎになった黒のライダースーツをビシッと決めていた。肌にぴったり貼りつくラバー仕様のもので、体のラインが露骨に浮き彫りになっている。スタイルが良く、健康的に引き締まった彼女の体の中、唯一アンバラ

ンスな巨大な乳房だけが、異様に目立ってしまっていた。それは健全なエロ少年の好奇の視線を浴びないわけにはいかなかった。

まずい、と思った。だが、大吾が止める隙もなく、母は瞬時に動いていた。

「…あぁん？」

初美はその少年に近づいていき、真正面の超至近距離で凄みを利かせる。

「誰のおっぱいがでけえだぁ～？てめえ、それセクハラじゃねえか……ぶっ殺すぞ！」

「ひ、ひぃ！」

突然の怒号に、少年は顔面蒼白になり、悲鳴をあげる。

「っていうか、誰がおばちゃんだ！まだそんな歳とってねえよ、クソが！マジしめんぞ！てめえコラ！」

「ひっ…ご、ごめんなさぁーーい！」

「ぎゃあああ！」
「逃げろ逃げろー！」
大吾の友人達は、蜘蛛の子を散らすように一目散に駆けていった。その場に残されたのは、親子二人だけだった…。
「ったく…おい、大吾！あいつらにいじめられたりしてないだろうな！もしなんかされたら言えよ！あたしがぶっ飛ばしてやるからな！」
初美は振り返り、大吾の方を見て堂々と言ったのだった。
「う…うん…大丈夫だよ、お母さん…」
このように、初美は相手が大吾の友達でもまるで容赦なく、どんな時でもそのヤンキーの本性丸出しだった。そんな彼女を、大人げない、ダメな母親と非難する人も当然いるだろうが、大吾自身はそんな母のことが、決して嫌ではなかった。思わず苦笑してしまうことも多々あっ

たが、むしろ案外気に入っていた。どんな時でも、母からは不器用ながらも愚直な自分への愛を感じることが出来たからだ。

「…ったく…おばちゃんはねえだろうが…まだそんな歳じゃねえよ…」

バイクをガレージに直しながら、ぶつくさと愚痴をこぼす初美。友人の何気ない一言は、存外本当に彼女の心をえぐったらしい。そんな母も、なんだかとても可愛いと感じる大吾だった…。

※※※

「ったく、んなことでまた悩んでんのか、てめえは！んなもんガツンと言っちまえばいいん

だよ、ガツンと！」
「うん…わかってるけど…でも…相手は部長だから…なかなかそんな訳にもいかなくて…」
「関係ねえよ、んなの！男だったらぶちかましてやれよ！刺し違える覚悟で！」
「う…うん…それは…わかるけど…」
母の初美と、父の俊幸。そして息子の大吾の三人は、夕飯の食卓を囲んでいた。母が作ってくれたエビフライとサラダを口に運びながら、大吾はもはやお馴染みとなった光景を眺めていた。
会社での悩みを女々しく打ち明ける父と、それを豪快に励ます母の図。そして母の手には、缶のままの生ビール…。夫婦のこのやり取りは、毎日のように繰り返されていた。
初美より一つ年下の俊幸は、成人男性にしては心配になるくらい痩せ型の、ひ弱な眼鏡の男

で、見た目のイメージ通り気も小さかった。正反対に負けん気が強すぎる初美に、いつも頼っていた。世間一般の夫婦とは、きっと役割が逆転しているのだろう。

だがこの父こそが、若い頃荒れに荒れていた母を、悪の道から引きずりだし更生させた張本人だというのだから、わからないものである。

「ったく…ホント情けねえ奴だなあ、てめえは…飽きもせずにうじうじうじうじうじうじと…ゴクッ…ゴクッ…ゴクッ…」

缶に残ったビールを、一気に飲み干してから初美は言った。

「…ぷはあ！わあったよ！ならあたしが代わりに部長に言ってやらあ！よし、部長に電話かけろ！あたしがてめえの代わりにぶちかましてやる！任せとけ！」

「わあ！い、いいよ、いいよ！初美ちゃん！ご

めんごめん、もう自分でなんとかするから…」
常識を逸脱した母の提案に面食らい、さすがに悩みを取り下げる父。こんな風に、極めてアクロバティックな形で問題が解決してしまうことも、二人にとってはしばしばだった。世の理想の夫婦像とは、程遠いのかもしれない。だが大吾は、両親の夫婦としてのこの関係性を、いつもとても心地良く眺めていた。
そして、自分がこの二人と家族であるという事実に、いいようのない幸せを感じていた。

※※※

翌朝。専業主婦の初美は、仕事と学校に向かう夫と息子を見送る。わざわざ律儀に玄関の外

まで出て送りだすのが日課となっていた。
「二人とも気ぃつけてな！ビシッとぶちかましてこいや！」
「はは。いってきます、初美ちゃん」
「お母さん、いってきまぁーす」
途中まで同行する父子は仲良く肩を並べて歩いていった。その姿が角の向こうに消えるまで、初美は二人の背中をじっと見守っていた。
「…さてと」
ここから、初美の専業主婦としての仕事の時間が始まる。俊幸と結婚するまで、およそ家事に分類されることには一切触れてこなかった初美にとって、それはいつまで経っても慣れるものではない。はっきりいって、炊事も洗濯も掃除も、全部苦手だ。面倒くさいったらありゃしない。だが、それでも頑張らなければならない。

世界中でなにより大切な、愛する二人の家族のために…。

「…あの～…すみません…少しよろしいでしょうか？」

「あぁん？」

家の中に戻ろうとしたその時だった。初美は後ろから呼び止められた。振り返ると、からし色の悪趣味なスーツに全身を包んだ、中年の男性が立っていた。五十代後半くらいだろうか。ぶくぶくと醜く太っていて、頭頂部は見事なまでにつるっぱげだ。両脇にわずかに残った哀しい頭髪が、そのみっともなさを際立たせている。さらに顔面は吹き出物だらけでやたら汚く、全体的に不潔で脂ぎった印象がとても強い。

一目見ただけで思わず後ずさりしてしまうような、明らかに気持ちの悪いおっさんだったのだ。

（うわ…なんだ、このキモい親父は…）
「え…なに？なんか用かよ？」
それでも知らない人には違いないというのに、つい大人にあるまじきケンカ腰で接してしまう元ヤンキーの初美。
「ええ…上妻…初美さんで…間違いないでしょうか？」
「え？…そうだけど…」
「ふふ…よかった…わたくし…沼尾と申します…あなたを探していたんですよ…」
「……」
沼尾と名乗ったその男は、余裕に溢れたやけに不気味な笑みを口元に貼りつけていた。記憶の中を隈なく探ってみたが、初美はこんな男は知らない。
「…で、その沼尾さんが、あたしになんの用なんだよ？」

「ふふ…まあ焦らないでくださいよ…これです…これをどうぞ」
沼尾は右手に下げていた黒いビジネスバッグからなにかを取り出し、初美に手渡した。それは、一枚のＤＶＤだった。市販されている、テレビ番組等をダビングしたりする用のもので、味気ない透明のケースに入れられていた。なにも書かれていない真っ白なラベルのディスクと、小さな紙が中に見えた。
「…まずはその映像をご覧になってください…中の紙に私の連絡先が書かれています…映像を見終わった後に…改めて連絡を入れて頂ければ結構ですから…それでは…」
言いたいことだけを一方的に述べ、沼尾はあっさり背を向けて去っていった。なんとも薄気味の悪い男だった。
そもそも、夫と息子を見送る初美に狙いすま

したように声をかけてきたということは、彼女の日々のルーティンを知っていて、わざわざ待ち伏せしていたということだろうか。いかに百戦錬磨の元ヤンキーといえども、さすがにゾッとせずにいられない。

「…なんなんだよ…ったく…」

日常に侵入してきた後味の悪い出来事に、初美は動揺を隠せなかった。しかしともかく、このＤＶＤの中身を確認してみることにした。話はそれからだ。

玄関をあがり、リビングのＤＶＤプレイヤーに、すぐにそれをセットする。問題なく再生される。しばらくは真っ黒い不穏な画面が続くが、やがて、映像が結ばれる。

そして。

「……な！」

幸せな家族の空間のテレビに描きだされた

それに、初美は思わず声をあげてしまう。
『…はあ？おい、なに撮ってんだよ！撮影していいなんて言ってねえぞ、こら！』
『いいじゃん、いいじゃん。撮らしてくれたら、十万プラスさらに十万で…全部で二十万あげるからさ』
『…本当だろうな？』
『ああ、本当だって。その代わり、ちゃんと僕の言う通りにするんだよ』
『…ったく…わあったよ…クソが』
『ふふ…じゃあこのカメラ見て…自己紹介してみて』
『はあ？んなことしてなにがおもしれえんだよ？バカか、てめえ？』
『いいから、いいから。ほら、早く。…二十万だよ』
『ったく…に…西村…初美…十九だよ…』

「……」

初美は一人、凍りついていた。それは、二十年以上も前の、自分自身の姿だったのだ…。

『あはは、いいねえ。じゃあ今からなにするか言ってみて。こんな風に……こういう感じで』

『はあ？なんだそれ！んなこと言えるわけねえだろうがよ！なめてんのか！』

『二十万だよ、に・じゅ・う・ま・ん！』

『…はあ…ったく…言うよ…言えばいいんだろ…クソが』

目つきの悪い顔を恥ずかしそうに真っ赤に染めた若かりし日の初美は、鋭い眼光でカメラをじっと見つめ、二十年後の自分自身をじっと見つめ、言ったのだった。

『は…初美は…今から…か…金に目が眩んで…か……彼氏いんのに他の男とファックすん

だよ！ち…チンポとマンコで交尾かますんだよ！も、文句あんのかよ！クソが！』

「！！！！！！！！！！！！！！！」

初美は絶句する。過去の自分が、過去の愚かすぎる自分が、今の自分の幸せを破壊しにきたのだと、直感していた…。

喧嘩最強元ヤンキーお母さんがキモデブハゲ親父に脅迫されて体も心も奪われる話

～陥落編～

この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。
また、登場人物は全員十八歳以上です。

「なっ…なっ…なんで…なんでこれが…この映像が…こ…こんなとこにあんだよ…」

背中まで伸びた長い金髪を後ろで無造作に束ねただけの初美は、リビングの床に立ち、ガクガクと膝を震わせる。テレビ画面の中の彼女も、今の初美と全く同じ髪型をしていた。

「くっ…」

映像には、思い当たる節があった。撮影されたことを、はっきりと覚えている。だが、今日までの約二十年間、この映像が初美の目に触れることは一度もなかった。撮影の事実を知っている者も周りにいなかった。だから記憶は徐々に薄れ、もう完全に忘れていたのだ。

なのに、今になって、何故…。

『れろっ…んん…べろべろ…えろえろ…んっ…ちゅろれろ…』

『ふふ…いいね、いいね…おっかない喧嘩最強のヤンキーとは思えない、とってもエッチでキュートな舌遣いだよ♪…彼氏以外の男のチンポ…もっと舐めて舐めて…どんどん舐めまくって♪』

『れろ…えろちゅろ…んっ…わ…わあってるよ…言われなくたって…べろ…んん…べろべろべろべろ…』

「はあ…ああ…ぬわっ…」

二十年の時を経て、人の妻、人の親となった初美は、その映像に悲鳴をあげずにはいられない。ギンギンにいきり勃ったズル剥けのペニスに、視線を伏せつつも積極的に舌を這わせる過去の自分自身の姿が、男の手に持ったカメラによって撮影されていたのだ。ベッドに仰向けになった男の股間に、服は着たまま思い切り顔を埋める様が、真正面からしっかりと捉えられて

いた。私的に撮られたものなので、勿論モザイクなどない。彼氏以外の男性のものに向けて、躊躇いなく躍動している過去の自分の生あたたかそうな赤い舌が、今の初美にとっては、ことさらグロテスクに映った…。

「ぐっ…ん…」

魂を抜かれたように棒立ちになる初美の目の前で、リビングのテレビの映像は、残酷にも至極淡々と進んでいく…。

『ふふ…ところで初美ちゃんは…彼氏いんのに…こんな風に結構援交してるんだよね…今日だけじゃなくて？』

『べろ…えろれろ…はあ？…ああ…べろべろ…そ…そうだよ…してるよ…えろっ…援交…べろえろ…別に今日だけじゃねえよ…べろ…ぶちゅぅう！ずちゅう！んん…わ…わりぃかよ！』

「ああ…はあ…」
『ははっ！いや、悪くない。別に悪くないよ。僕にとっては別になんにも悪くないんだけどね…でもさあ、ほら…彼氏に対しては、申し訳ないとかは…少しはないわけ？』
『それは…べろ…えろえろ…まあ…少しは…そりゃ…あるけど…れろれろ…でもしょうがねえだろ…んっ…べろぉ～…えんろぉ～…はあ…金欲しいんだから…バイク買いてえし…べろべろべろっ…ん、っていうか！さっきからなに変なことばっか言わせてんだよ！なんでこんなこと言わなきゃなんねえんだ！いい加減にしろよ、てめえ！』
『あはは。まあ怒らないで、怒らないで。その調子でちょっとこういうことしてみてよ。こういうポーズして……こういう目でカメラ見て……。で、彼氏の名前を呼んでこう言うの。

こんな感じ……こう』
『はあ！ふざけんな！なに考えてんだ！狂ってんのかよ、てめえは！なんでんなことしなきゃいけねえんだ！マジしめんぞ、ごらっ！』
『三十万。今のが出来たら全部で三十万だよ。どうする？やるの？やらないの？』
『くっ…く…くそ！……や…や…やってやるよ！クソが！』
映像の中の初美は、いきなり右手の中指を突き立ててカメラをギロリと睨みつけた。喧嘩三昧のヤンキーらしい、すこぶるドスの利いた凶悪な視線だった。そして彼氏以外の亀頭に力強くべとッと舌をくっつけたまま、彼女は言ったのだった。
カメラ目線で。
…とんでもないセリフを。
『…と…俊幸！あ…あたしはてめえっていう

彼氏がいんのに！はあ！べろっ！べろべろ！か、金欲しさにこうして他の男のチンポ、な、舐めて舐めて舐めまくってんだよ！こ、こんな風にな！んん！べろ！べろべろべろべろべろべろべろべろ！はあ！ほ…他の男のチンポ！べろべろべろべろべろべろべろっ！んっ、はあ！か、彼女が他の男のチンポの亀頭ねぶり倒すこのえげつねえ舌の動きをよく見ろや、俊幸！ああ！べろべろっ！べろべろべろべろべろべろべろ！か、彼氏いんのに他の男の亀頭べろべろべろべろ！べんろべんろべろべろべろっ！んん、ああっ！も、文句あんのか！な、なにがわりいんだよ！あ、あたしが金欲しさにどこの誰のチンポ舐めようがあたしの勝手だろうが！別に誰のチンポ舐めてもいいだろうがよ！そ、束縛すんじゃねえよ！み…身勝手彼氏の俊幸！こ、このクソ彼氏！はあ！』

「！！！！！！！！！！！！！」

衝撃と共に、初美は急激な罪悪感で心臓を締めつけられた。中指ファックポーズで滅茶苦茶に亀頭を舐め回した過去の彼女自身が明かしたように、この映像が撮影された当時、初美が付き合っていた彼氏とは、今の夫の俊幸に他ならないのだ。

「あぁ…ああ…」

この頃はもう、初美はそれなりに真剣に俊幸と交際をしていた。彼から浴びせられる経験したことのない純粋な愛に心を奪われ、ヤンキーから足を洗い、更生しようと本気で考えつつあった。にもかかわらず、当時初美は平然と援交を続けていた。だからこそ、胸を切り裂く忸怩たる思いに苛まれた。

（…すまん…マジすまん…俊幸…）

勿論、援交のことを俊幸は知らない。彼には

絶対に言えない数の援交を初美はしてしまったが、撮影を許したのはこの一度きりだし、封印した過去の秘密がバレるかもと心配するようなことはこれまでなかった。

だが今、初美の前に出現したこの映像によって、その大前提が覆されようとしていた…。

「…く…くそ…」

それにしても、あの沼尾という男は、どうしてこの映像を持っていたのか。この時の援交相手は、声や口調からもわかる通りとても若い男だったはずで、あれから長い月日が経っているものの、あの沼尾という男と同一人物ではないことだけは断言出来る。

それなのに、何故…。

「く…」

『あはははは！すごい！厳ついヤンキー女に、金の力でエロアホなことさせんの最高！』

『はあ？ふざけんじゃねえぞ、てめえ！調子乗ってっとマジぶっ殺すぞ！ああっ！くそっ、えろえろ！べろべろべろべろっ！』
『ふふ、まあそんな怒らないでよ♪ちゃんと約束通りお金はあげるからさ。さっき見せたでしょ？今日は親の金たんまり持ってきてるから。だからお金が欲しいなら、僕の言う通りにするんだ』
『えろ…べろ…く…くそ…べろべろべろべろべろべろ！』
『にゃはは！いいね～。は～大金持ちの息子ってやっぱ最高～(笑)♪ふふ、じゃあ初美ちゃん、次の質問いくよ。そんな緩い感じで援交してるなら、初美ちゃんは彼氏いるのに……ズバリ！普通の浮気も平気でしてるでしょ？』
『はあ？えろえろ！ん…そ…そんなの…はぁ…ちろちろえろえろ…し、知らねえよ、クソが

…べろべろべろ！』
『あはは！もう白状したも同然じゃん！嘘がつけないんだね、初美ちゃんは？かっわいい～♪ほら、ちゃんと答えて。初美ちゃんは彼氏がいるのに他の男とも普通にセックスしてるでしょ？ほら、言っちゃおう♪正直に言えたら賞金はどんどんアップするよ(笑)』
『べろちゅろ…はあ…くそ…ん…あ…ああ…し……してるよ！か、彼氏いるけど他の男とも普通にヤッてるよ！そうだよ！わ、悪かったなヤリマンで！べろべろべろ！』
「ああ…ああ…」
『あはは！悪くない、全然悪くないよ！むしろめっちゃ可愛いよ！じゃあセフレも普通にいるよね？正直に、ＧＯ！』
『べろべろれろれろ！はあ！い…いるよ！あたし！んん！か、彼氏いんのにセフレも普通に

いるよ！てめえの言う通りだよクソが！はあ！ああっ！べろべろべろべろべろ！』

「くっ…あぁ…」

変わらず積極的にペニスを舐め回しながらなされた十九歳の自分の赤裸々な告白に、四十一歳の初美は嘆きの呻きを漏らす。

それは、ヤンキーという属性にカムフラージュされた、初美が本当に隠したい過去の暗部だった…。

『…最高。このヤンキー女、もう可愛すぎ♪じゃあ僕のチンポ深く咥え込んでじゅぽじゅぽいわせながら、さっきみたいにカメラ見て彼氏に告白してごらん。こんな風に……こう。セフレの人数も告白して。ああ、中指もちゃんと立てて、ヤンキーらしく理不尽に逆ギレする感じでね。これが出来たらいよいよ五十万円です！さあ、いこう初美ちゃん！』